

友好の証し 17歳が伝える

県内高校生「青い目の人形」番組制作

非戦の誓い 令和につなぐ

「アメリカに対する怒」と 送部の小川光さん(17)と石井闘志を燃やさせるため、人形 耕和さん(17)は今春、静かに「たは見せしめのちに燃や 語られる言葉の数々に、そつされた」。吉田高3年で放とマイクを向けた。語り部は

「アメリカに対する怒」と 送部の小川光さん(17)と石井闘志を燃やさせるため、人形 耕和さん(17)は今春、静かに「たは見せしめのちに燃や 語られる言葉の数々に、そつされた」。吉田高3年で放とマイクを向けた。語り部は

同い年の志村真裕希さん(17) 山梨英和高三。資料を取めた分厚いアルバムをめくりながら、戦争と「青い目の人形の歴史を語った。

1927年、日米友好の証しとして米国から日本へ約1万2千体が贈られた「青い目の人形」。山梨にも129体が届き、それぞれ幼稚園や小学校に配られた。だが太平洋戦争が開戦すると、「敵性人形」として処分されたり、空襲の被害に遭ったりして多くが失われた。現在、県内では当時の教員らが隠し持っていたら体が残るのみだ。

小川さんと石井さんは、今年の冬に顧問を通じて「青い目の人形の存在を知り、制作するラジオ番組のテーマとすることを決めた。2015年の山梨日日新聞に「青い目の人形を研究している」として紹介されていた志村さんに、取材を依頼した。

中学校時代、県内外の人形を調査した志村さん。学習発表などを除いて、同級生らに

【写真右】「青い目の人形」ジエニサちゃんを手にする小川光さん 富士河口湖・河口小【同左】「青い目の人形」について研究した志村真裕希さん 山梨英和高三

人形の話をやる機会はずっとなかったといふ。「関心のあがるかしなければ歴史は忘れられてしまう。取材はうれしかった。番組を通じて一人でも多くの戦争を知らない世代に届いてほしいと願い、快諾した。

志村さんの言葉は小川さんと石井さんの心にも響いた。石井さんは「アコが遠い出来事のように思っていた戦争をリアルに感じられたらいい。歴史に関心を持つ同世代に刺激を受け、「自分たちもきちん」と過去に目を向けようと思

ろきっかけになった。2人は人形を保管する河口湖・河口小に都留、谷村小にも足を運び、教員から人形を守られた経緯を聞いた。両小の人形も戦時中は学校関係者によって守られていたとされている。小川さんは「話を聞く中で、人形を平和の象徴として命をかけて守った人たちの熱意を感じさせた」と振り返る。

志村さんと教員のインタビューは、7分間の作品にまとめられた。タイトルは「5/129」。人形が残る富士河口湖・河口小に都留、谷村小にCDを贈ったほか、都留二中の生徒にも披露した。「知った真実」が生まれ

たんでつと小川さんは言う。歴史を知り、人形を守った人たちの思いを聞いたからには、それを伝えなければならぬ。若者世代へ、平和の願いを届けようと考えている。

番組は聴く人の問いかけで締めくくる。「戦争のない時代だからこそ、129分の5の意味を考えよ」とつたき

〈本田未来〉